

第41回農業ジャーナリスト賞の決定について

2026年5月18日

農政ジャーナリストの会

農政ジャーナリストの会は、前年(2025年1月～12月)に発表された農林水産業、食料問題ならびに農山漁村の地域問題などに関するジャーナリストの優れた功績(ルポルタージュ、連載企画、出版物、放送番組、映画など)を表彰しています。

今回は新聞・書籍・映像部門から計28点の応募がありました。この中から、農政ジャーナリストの会役員及び外部有識者による「農業ジャーナリスト賞選考委員会」の審議を経て、下記の5作品が選ばれました。

6月12日(金)開催の農政ジャーナリストの会第63回総会で表彰します。

第41回農業ジャーナリスト賞受賞作品

- ・「つながるごはん つくり手と食べ手をむすぶ鳴子の米」
(一般社団法人農山漁村文化協会刊)
- ・「食をまもる危機への処方箋」(岩手日報社)
- ・「海を継ぐ～いつか瀬戸内に魚が戻る日」(岡山放送)
- ・ETV特集「草の大地に生きる―ある放牧酪農家の人生―」(NHK)
- ・ETV特集「カイル博士と棚田の集落」(NHK広島放送局)

【総評】(農業ジャーナリスト賞選考委員会)

「令和の米騒動」に揺れ続けた2025年は、農業への注目度が近年にないほど高まった年でもあります。そのためか、農業ジャーナリスト賞にも例年を大きく上回る応募をいただき、質の高い作品が集まりました。

政治的にも社会的にも農業・農政の状況が激しく変化する中、通時的な視点で現場の「今」をすくい取って丹念に追い続け、多角的な視点で描いた作品に数多く出会えたことに、選考委員一同、感謝しています。

今回は、選考委員会でも委員間で評価が分かれ、熟議が交わされた結果、次の5作品を受賞作品に選ばせていただきました。

【受賞作品の講評】

● 「つながるごはん つくり手と食べ手をむすぶ鳴子の米」

(一般社団法人農山漁村文化協会刊)

「令和の米騒動」をめぐる報道が、ともすれば価格問題、流通問題、農業現場の混乱、短期的な政府の対応などに偏りがちな中で、20年前、宮城県の中山間地域である鳴子町（現・大崎市）で日本型C S Aとして取組がスタートした「鳴子の米プロジェクト」のこれまでの軌跡を描いた1冊。生産と消費の分断を超えた同プロジェクトの意義をさまざまな角度から分析し、他の地域で同様の実践に取り組む人々による「つながる農業」を語る言葉が、日本の農政・農村政策への問いにつながっている。著者が多く散漫になりがちな構成とメッセージ性に1本筋を通した編集力の高さも光る。

● 「食をまもる危機への処方箋」

(岩手日報社)

昨年のホットな話題であるコメを導入に、農地・麦・畜産・フードロスなど、幅広い視点で、県内外の生産・流通・消費の各現場取材した半年にわたる連載。たった二人の取材班でこれだけの連載報道を完遂したことに、まずは敬意を表したい。長期連載でテーマを広げすぎたこともあり、やや散漫になった観もあるが、特定の視点や意見に偏らず、通時的かつ複眼的に、これまでの農業・農政を振り返り、これからの農業の展望を論じている点や、集落営農連合の限界、自主減反など独自の内容を含んでいる点でも評価できる。

● 「海を継ぐ ～いつか瀬戸内に魚が戻る日～」

(岡山放送)

岡山県の下津井漁港で私設魚市場を営む店主の女性の姿を通して、瀬戸内海の水産資源減少、漁業の後継者不足、港町の過疎化の中での地域づくりを追跡したドキュメンタリー。高度成長期、富栄養化による「汚れた海」が、今では「きれいすぎる海」(貧栄養化)に変貌し、逆に水産資源が減少し漁業が衰退する中、人間と生き物たちがともに暮らせる「豊かな海」と「豊か

な社会」を目指し、市場の経営継承や特産品開発に取り組む姿に希望が感じられる。店主の「魚が少なくなったのは人災」「早急に解決しようとする」と副作用が出る」などの言葉に、改めて「豊かさ」の意味や息の長い地域おこしのあり方に気付かせてくれる作品に仕上がっている。

●「草の大地に生きる―ある放牧酪農家の人生―」

(NHK)

放牧酪農で著名な酪農家・吉川友二氏の生と死を通じて、彼の自然観や農業観、さらに人生観や家族観なども描きながら、今や「放牧酪農推進のまち」となった足寄町の酪農の歴史、吉川氏の思いを引き継ごうとする息子や研修生など若き酪農家たち、6次化に取り組むチーズ職人など、吉川氏が磁場となり集まった人々の熱い思いが、美しい牧場風景とともに描かれている。放牧酪農の発展による経済的・社会的な影響よりも、吉川氏個人を中心に据えた点は評価が分かれるが、取材途中での吉川氏の余命宣告、終末期、死後の散骨風景まで映像に収められており、取材対象と制作側との信頼関係の深さも実感させられる。

●「カイル博士と棚田の集落」

(NHK広島放送局)

岡山県の棚田集落に移り住んだ米国人・カイル博士の目を通して、中山間地域の実像を活写した作品。カイル氏の語る棚田集落の暮らしの価値、一方で過疎高齢化、後継者不足の中で将来が見通せない厳しさに直面する集落の人々の悩みや葛藤を描いている。中山間地域直接支払い申請や役員改選をめぐる集落の話し合いと衝突、それでも埋み火のように存在し続ける地域への思いや人と人のつながりなど、多くの中山間集落が共有するリアルが細かに浮き彫りにされている。集落役員に就任したカイル氏の「この土地の可能性を信じる人々のつながりがなくなならない限り、この逆境にあらがう道は残されている」という最後の言葉に一縷の希望も込められた、奥行きのあるドキュメンタリー作品になっている。

＜選考委員＞（50音順）

小田切徳美	明治大学農学部教授
小谷あゆみ	農政ジャーナリストの会副会長
榊田みどり	農政ジャーナリストの会前副会長・明治大学兼任講師
下山隆雄	農政ジャーナリストの会副会長
日向志郎	農政ジャーナリストの会会長
行友 弥	農政ジャーナリストの会前会長
吉村秀清	農政ジャーナリストの会副会長

（本件に関する問い合わせ先）

〒100-6826 千代田区大手町 1-3-1

J Aビル 2 6 階

農政ジャーナリストの会事務局

電話：03-6269-9772

携帯：090-4960-6353（竹村）

以 上